三納小中学校
校長室便り

手をつなごう

令和５年１２月１１日（月）
第　１２　号
文責　校長　鮫島　良樹

皆さんは、「少年革命家」を名乗る中学生ユーチューバー・ゆたぼんをご存じでしょうか。「学校は行きたい時に行く」、「不登校の自由」などを主張して、動画配信を行っている彼。児童・生徒のスマホ普及率は年々上昇し、今や、彼らユーチューバーの影響力は侮れないほど強大になっています。

前任校の椎葉小で、ゆたぼんと同じようなことを言って、学校に来ない子どもさんがいました。担任を離れて十年近く。その間に「不登校の児童・生徒数がコロナ禍で拍車がかかり、過去最高になった。」「多様性に応じていくために、学校は変わっていく必要がある。」等が報じられ、今や学校の存在意義に関わる大きな問題になってきました。不登校問題にきちんと向き合うために、彼らの思いは如何なるものか、「ゆたぼんの考える自由」を少し追ってみたのが、昨年の話です。

理不尽さを学ぶ

ツイッターなどSNSの普及により、誰でも気軽に自分の思いを発信できるようになった昨今。気持ちの良い投稿もありますが、ストレス社会の反映か、文句や中傷で、はけ口にしている人も相当数いるようです。そんな中でよく目にするワードが「理不尽」。納得いかない！不利益を被っている！言わないと気が済まない！おかしいだろ！とクレームを訴えたい人が多いようです。個人主義が広まっていく過程において「“世の中は、自分へのサービスのために存在している”と勘違いして感謝や我慢の心を忘れる人々が増えるだろう。」と、以前から危惧されていました。文句の一つも言いたくなる気持ちは分かるけれど、“世の中に理不尽さはつきもの、万人が納得できることなどあり得ない”と思考することも必要ではないかとも言われます。（ある調査によれば「正義感が強く、正論を重んじるお堅いタイプの人」が理不尽さを訴える傾向が強いそうです。）

昔は「社会に出る前に、理不尽さを学ぶところが学校だ。」という言葉をよく耳にしましたが、最近は「理不尽さに抗うことを学ぶところが学校だ。」と言う人もいるそうです。抗っても解決（納得）できない部分が世の中にはあること、白黒だけではなくグレーの部分があることを知る意味では、一理あるかもしれません。

同じ年齢という括りで集団（学級や学年）を形成されている子ども達。様々な面で比較され、競争させられます。公平に平等に…と、同調させられたり仲良くさせられたりします。もちろん利点もあるのですが、この状況では、いじめや不登校が起こるのも自然なことなのかもしれません。

そもそもの意義・目的

ここからは、改めて、「なぜ学校に行かなければならないのか」、焦点化すると「学校で学ぶことは何か」について考えてみたいと思います。「学校の勉強は無意味だ！」と十把一絡げで声を出す人々に聞いてみたいことでもあります。紙面の都合上、各教科で学ぶこと（意義）について取り上げます。国語は何を学ぶのでしょう。日本語の何を学ぶのでしょう。簡潔かつ的を射た答えが出せるかな？主要４教科だけお付き合いください。

国語→（　　）
算数→（　　）
社会→（　　）
理科→（　　）

答えは「学習指導要領」に書いてあるのですが、お堅い言葉が並んでおり、今一つピンときません。子ども達に学ぶ楽しさや喜びを教える教員ならば、ぐっと味のある答えを求めたいものです。（職員には解答させました。）以下は私の答です。

国語→（言葉や文章の美しさ、巧みさを学び、感情や思考を深める。）
算数→（数や図形の明瞭さ、簡潔性を学び、処理や応用に活かす。）
社会→（個ではなく社会における人の営みを学び、世の常を知る。）
理科→（自然や科学の事象・法則を学び、諸々の保持、発展に活かす。）

小学生にこんな難しい話をしても理解不能です。大人になってようやく答えられる問題だと思います。そして、大切なことは、答えの善し悪しではなく、「自分で掴み取ったもの」「自分で醸し出せるもの」があるかどうかだと思います。学校で幼い頃から何の勉強をしてきたのか、いちいち覚えていませんし、答えられません。学ぶ意義を感じながら学校に通った記憶もあまりありません。でも、大人になってから分かるのです。

じわーっと蓄積されてきたもののおかげで、今の思考ができるようになったこと。様々なことに触れ、体験することで視野や可能性を広げることができたこと。学びたくても学べない状況の国や過去の時代があり、自分はいろんな学びを提供してもらえる恵まれた環境であったこと。

「自分で学びたいことを学べばいい。時間の無駄だ。」という考えは間違いとは言えません。但し、それを実行に移している人は口に出しても構いませんが、その思考を自己防衛のために拝借したい人がいる、鵜呑みにしてしまう子ども達がいることは忘れてはならないと思います。

広い視野をもつために

世の中に理不尽さはつきものであるならば、その理不尽さとどのように付き合っていけばよいのでしょうか。感謝や我慢の心を育むこと以外に、対処方法はないものでしょうか。

私は、そこにこそ、学校の存在意義があると考えています。今後、日本は公教育の在り方を見直す時期が必ずやって来ると思います。実際、私立学校をはじめ、不登校児童・生徒の通う適応教室、フリースクール、PC（タブレット）を使用する自宅学習や通信教育など、学ぶ場所の選択肢は様々増え、ニーズも高まっています。ただ、親の収入によって教育格差が生じてしまうと子ども達が犠牲になるので、公教育は存続しています。

どなたかお分かりになりますか？
ALT のイーサン先生です。

人は集い、かかわり、助け合ったり、協働したりして生きていきます。一人では生きていけないので、社会を形成します。当然、いいことだらけではありません。犠牲や奉仕が伴うし、時には傷付け合うこともあります。でも、社会の一員として生きていく生き物であるから、不器用でも人と付き合っていくしかありません。他者と協調して生きていくために求められるのは、「広い視野」ではないでしょうか。学校に行かずに自宅で一人籠もり、バーチャルな空間や価値観の似通った人とだけネットでつながって生きていく。居心地は良いかもしれませんが視野は狭まり、何より理不尽さ（痛みや苦労）を味わう経験が乏しくなるので、たくましさを育むことが難しくなります。

ここまで述べてきた私見は「正論」だと思います。不登校に悩む親子には、それぞれに乗り越えがたい事情があり、一筋縄ではありません。某首長が「不登校問題はほとんどが親の責任だ！」と暴言を吐いて、マスコミに取り上げられました。我が子の不登校を隠れ蓑として保身しよう（様々な支援・優遇措置を得る）とする世帯が（一部ですが）増えていることに、首長は腹を立てていたようです。“ゆたぼん”は、何やら方向転換したようですが、今後も、「本質を捉え、広い視野で、本当に苦しんでいる子ども達に寄り添っていきたい」と思っています。